

ミステリ読書案内

2024. 5. 10 発行元

第573号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

土屋隆夫「ベスト表」(再掲)

鮎川哲也などとともに戦後の日本の「本格ミステリ」を牽引していた土屋隆夫。その『ベスト表』を再度取り上げてみる。作品の数は思いの外少ないが、一作一作がミステリ史に残る傑作ぞろいである。

「本格ミステリ」としての仕上がりに

土屋隆夫の『ベスト表』を書いてみると「あれ、これしかなかっただろうか?」と思ってしまう。50年も前に読んだのだから…。でもそれなりにインパクトが強かったのだろうと振り返る。

以前の『ミステリ読書案内』の代表作の号では『危険な童話』『天狗

の面』『天国は遠すぎる』の三作を取り上げた。今回は順番に『影の告発』と『針の誘い』である。図書館の開架書棚には大文字本以外に土屋隆夫の本は並んでいない。昭和三十年代四十年代頃の「本格ミステリ」の捕らえ方を分析するには最も適した作品たちだと思う。今読むと古々しさを感じるだろうが、若い人たちにも是非読んでほしい。

《土屋隆夫のベスト表》

1. 危険な童話
2. 天狗の面
3. 天国は遠すぎる
4. 影の告発
5. 針の誘い
6. 赤の組曲
7. 盲目の鴉
8. 不安な産声
9. 妻に捧げる犯罪
10. 奇妙な招待状 (短)
11. 九十九点の犯罪 (短)
12. 最後の密室 (短)

短編集は、他にも各出版社によっていろいろな形で出ているのだが、私はこの3冊しか読んでいない。

「影の告発」

1963年にポケット文春から出た本。前年探偵小説雑誌『宝石』に連載された後単行本になった。私の手元にあるのは1975年の講談社文庫。『天狗の面』『天国は遠すぎる』『危険な童話』に続く長編第四作。千草検事シリーズの一冊となる。この年の日本推理作家協会賞受賞作品。

出だしを読むと私が子どもだったころの世の中の様子が描かれている。今の若い人たちにとっては別世界かもしれないけれど…。舞台はデパート。黒い制服に身を固めた中学生、高校生の修学旅行生が東京の東都デパートに大集団でやってくる。デパートの店員は「鴉の大群」と呼んでいる。田舎から出てきて、見学して、大騒ぎをして帰っていく。この時点では客として期待できないが、数年もすれば集団就職して都会に移住してくる。未来のお客のために…。特に大変なのがエレベーター案内係の竹原佐知子。初めて乗るエレベーターに興奮する生徒を乗せ、一日中案内を続ける。四月六日。ぎゅうぎゅう詰めのエレベーターの箱の中で「痛いじゃないか」と声上がる。七階で多くの客が降りた後、佐知子に倒れかかってきた男性は「あの女が…いた…」という言葉を残して絶命する。たまたま三階の知人の書道展を見に来ていた千草検事は現場に直ちに赴く。多くの人中での大胆な犯行。手掛かりは名刺と古い母親と娘らしき人物が写った写真。14ある章の題名は四文字に統一してあって、なおかつある少女のモノログめいた文が添えてある。緻密に構成されたアリバイトリック。張り巡らされた伏線…そして題名まで…。

「針の誘い」

1970年双葉新書。この年の『推理』に掲載された後単行本になった。私の手元にあるのは1977年の角川文庫版。本書もまた千草検事シリーズの一冊である。角川文庫の解説を書いているのは島崎博。後の探偵小説専門誌『幻影城』の編集長。島崎氏は本書を笹沢佐保『他殺岬』、高木彬光『誘拐』、小林久三『火の鈴』と並べて「誘拐テーマ」のミステリでの身代金受け渡しの工夫に優れていると解説している。この時期のミステリでは「誘拐」のヴァリエーションが広がりそれが特徴的だった。

東京地検の千草泰輔検事は、渋谷の大山町からの帰途、タクシーを拾おうと考えていた時、路地からひとりの女が飛び出てきた。「なにかあつたんですか」と聞くと「ミチルちゃんがいらないんです。だれかに連れていかれて…誘拐されたんです」と答えが返ってきた。急遽その家に入って事情を聞くと、ミチルちゃんは路原製菓社長の娘でまだ一歳とのこと。走り出てきた女は路原家のお手伝いさんの野中加代。ミチルちゃんの母親は代々木の実家に出掛け、家には路原由人と加代が残っていた。一時間ほど前に電話が入り、母親が交通事故に巻き込まれたので病院に来るようにと言われた。ミチルは二階で寝ていたので、由人と加代が車でかけた。言われた病院は存在せず、加代だけが家に戻ってくるとミチルが誘拐されていたという流れ。千草検事が警察に連絡を取り、家の中を調べると夫婦の寝室から身代金を要求する手紙が見つかった。夫婦から警察は動かないよう頼まれ、見守っていると、身代金を持参した母親が殺されてしまった…。